北海道の印刷出版文化情報誌
季刊アイワード
Quarterly iWORD
クォータリーアイワード
2026年11月
第31号（通巻377号）

THIS IS MECENAT 2026



特集

地域の自然が教育資源――40年以上続く夏の冒険
知床への郷土愛と生きる力を育む子どもたち
―― 羅臼町ふるさと少年探険隊

北海道・本のある風景
……よはくの本やさん
代表　小川　順子 さん

Book Stories 本づくりのさきにあること――。
……ピラケシ　平岸開村150年記念郷土誌
北海道新聞永田販売所（道新りんごステーション）代表取締役　伴野　卓磨 さん

ほっかいどうの本
……『写真集 北大150年』……北海道大学出版会
『イグノーベル賞受賞！ オスメス逆転昆虫トリカヘチャタテの研究』…札幌農学同窓会
『佐藤毅写真集　野に祈る』……共同文化社





大量のイタドリを刈り取って風呂小屋の屋根に使う



わんぱく隊のゴール・モイレウシ湾で遊ぶ様子



使った後の飯ごう、食器を川で洗う（4 枚とも羅臼町教育委員会提供）

特集

地域の自然が教育資源。40年以上続く夏の冒険、知床への郷土愛と生きる力を育む子どもたち

――羅臼町ふるさと少年探険隊

道路も通っていない知床（しれとこ）半島の先端部にある海岸で、夏休み中の地元小中学生が親元を離れて共同生活を送り、さまざまな野外活動を行う「羅臼（らうす）町ふるさと少年探険隊」。活動は1981年に始まり、通算40回以上続くこの取り組みは、子どもたちの生きる力と、郷土への愛着を育んできました。

長期的な継続を可能にしている地域住民の熱意と協力、現在の課題などについて、探険隊の隊長を務める羅臼町子ども会育成協議会の葛西良浩会長と、事務局の羅臼町教育委員会社会教育課の吉田盛一社会教育係長に話を聞きました。（文・写真／片山健一　取材日2026年10月5日）

最果ての秘境で美しい夕日を子どもたちに

北海道の北東部に位置する知床半島は、火山活動などによって形成された標高1500㍍級の急峻な山々、海岸断崖、湿原・湖沼群などがあり、原生的な自然環境が今も残っています。特に、世界自然遺産区域でもある知床半島先端部は、道路がなく、動力船による上陸も禁止されるエリアで、容易に人が立ち入ることのできない〝秘境〟です。

知床半島東側にある羅臼町の市街地は、夕日が羅臼岳などの知床連峰に遮られ、日没時間よりもかなり早く暗くなります。「羅臼町ふるさと少年探険隊」は、町の子どもたちに、「水平線に沈む、美しい夕日を見せたい」という思いから1981年に始まりました。少年探険隊が目指すゴールは、知床半島の最北端、知床岬です。岬にたどり着けば、見渡す限りの水平線が広がっています。29歳の時に羅臼町に移住した札幌市生まれの葛西さんも「夕日も、朝日も本当にきれいで、見に行く価値はあると思います」と言います。



隊長の
葛西良浩さん

町内の子どもたちが毎年参加する探険

ふるさと少年探険隊は、7月下旬から8月上旬の夏休み期間中に、羅臼町子ども会育成協議会と羅臼町教育委員会の共催で実施します。隊長は歴代、子ども会育成協議会の会長が務めます。定置網漁の会社を営む葛西さんは、5代目の隊長として2019年の第37回から探険隊を率いています。

探険隊に参加するのは、町内の小学生と中学生です。町内に15ある子ども会から2人程度の参加を想定して毎年定員34人を募集していますが、基本的に希望者は全員参加させるため、過去には40人を超えたこともあります。2026年の第42回からは、隊列が間延びしないよう体力差などを考慮し、例年小学4年生以上としていた年齢制限を5年生以上に引き上げました。それでも、定員以上の36人から応募がありました。



町教育委員会の
吉田盛一さん

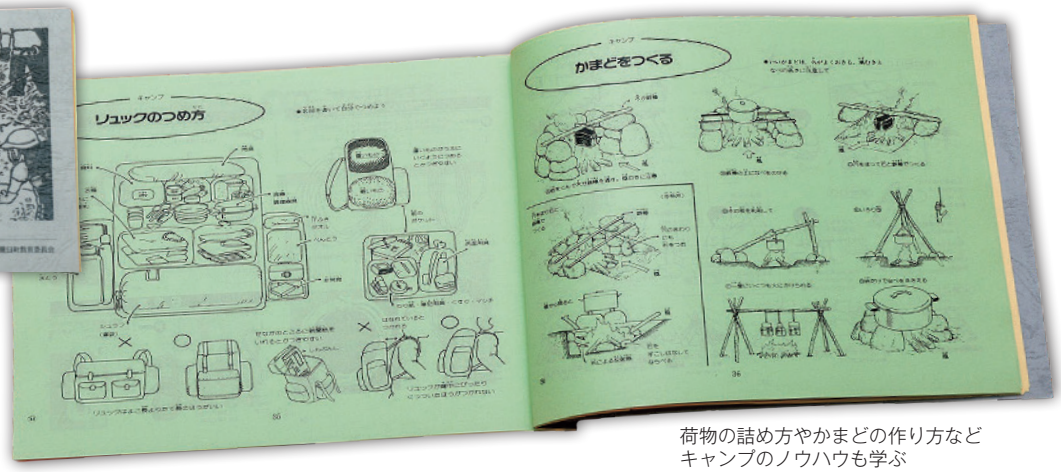
羅臼町相泊地区から知床岬までの約22㌔は、石ころだらけで歩きにくい「ゴロタ浜」の海岸線をひたすら歩くことになります。道中には、登山用ロープを使った登り降りや、崖にへばりつくようにしての横移動、大きく山側へ迂回しなければならない難所がある上、ヒグマなどの野生動物が高密度に生息するエリアです。大人のボランティアスタッフが同行して、子どもたちの安全や健康状態に配慮しながら5泊6日の探険を行っています。

地元への深い理解を育む町を挙げた取り組み

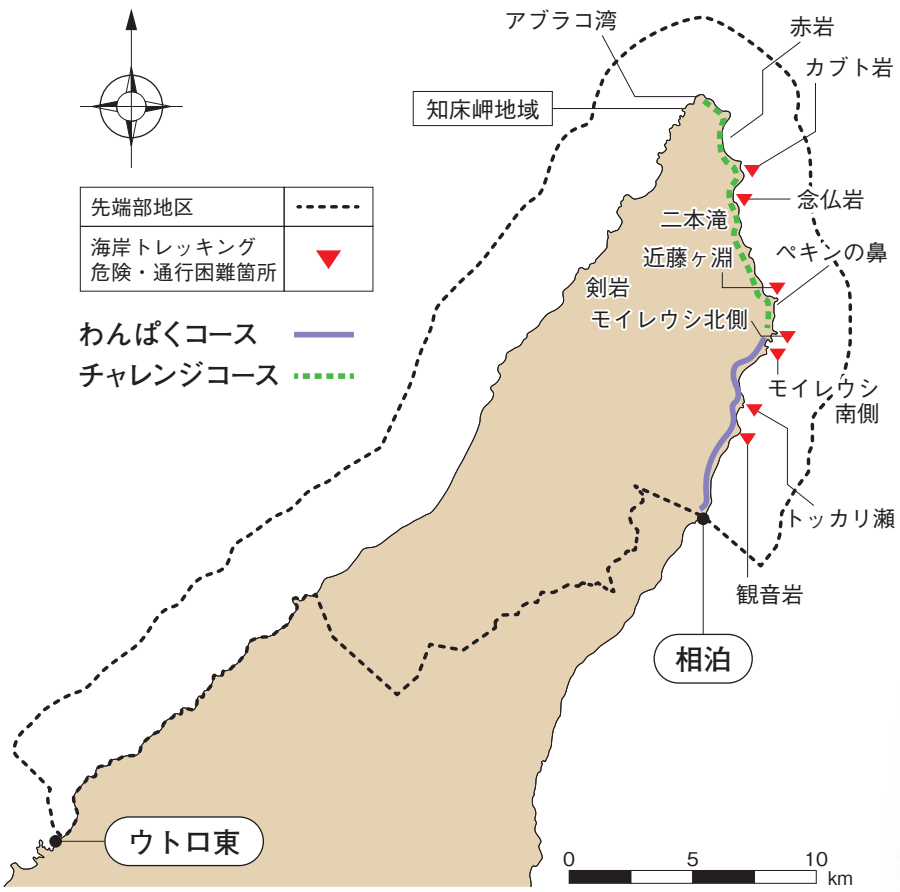
羅臼町では、幼児から高校生まで一貫して「知床学」という特別な授業を行い、知床ならではの生物多様性や生態系、地域の産業などへの理解を深める教育に力を入れています。ふるさと少年探険隊も、知床の自然を「教育資源」として活用し、子どもたちの自立心、協調性、忍耐



「隊員のこころえ」や一日の
活動予定などが記された手帳



荷物の詰め方やかまどの作り方など
キャンプのノウハウも学ぶ



知床半島先端部


探険の出発点、羅臼町相沼地区

力、郷土愛などを育む、地域ぐるみの人材育成事業として位置付け、町が毎年度予算を措置して実施しています。

探険隊には、子どもたちとほぼ同数のボランティアスタッフが同行します。役場職員や教職員、知床財団の職員、消防士、漁師、看護師、高校生らの地域住民のほか、探険隊OBで本州から毎年参加する人もいます。ただ、「期間中の約1週間は、仕事を休むことになります。毎年来てくれるメンバーだけではいつも10人ぐらい足りず、声を掛けて回ってなんとか必要な人数を確保しています」と町教育委員会の吉田さんは打ち明けます。

また、漁業者が所有する番屋は、宿泊のほか、大雨などの緊急時に避難場所として使用することもあり、これらに関係先の許可や協力が欠かせません。ヒグマクルーズ船などからはヒグマ目撃情報の提供を受けるなど、地域の多くの人々が、探険隊をサポートしています。

「わんぱく」と「チャレンジ」5泊6日のサバイバル生活

探険コースは「わんぱくコース」と「チャレンジコース」の2種類に分かれていますが、どちらも5泊6日の日程です。わんぱくコースは、相泊地区から約9キロ地点にある波が比較的穏やかなモイレウシに滞在して、さまざまな野外活動を行いま


岩につかまりながらの移動（羅臼町教育委員会提供）

す。わんぱくコースの経験者で小学6年生以上（2026年からは中学1年生以上）だけが、モイレウシからさらに知床岬まで進むチャレンジコースに挑戦できます。

単なる自然体験キャンプと大きく異なる点は、活動中は電気・ガス・水道などが使えず、薪を割る、火を起こす、食事を作る、川の水を利用して洗い物をする、入浴するなどの日常の営みを、仲間と協力して行うことです。

わんぱく隊は「いかだに乗ったり、釣りをしたりする遊びの時間もありますが、一日3食を自分たちで用意するので、火起こしを含めれば、ほとんどの時間を料理に費やす感じ」（葛西さん）のサバイバル生活となります。食事のメニューはご飯と味噌汁のほか、豚しゃぶサラダ、きんぴらごぼう、マスのシチューなど日替わりです。

ボランティアスタッフは、安全に関わること以外には口を出さず、子どもたち自身が考え、判断し、行動する様子を見守ります。暑い日の熱中症予防やヒグマの追い払いなどのほか、「もう帰りたい」などと弱音を吐く子に寄り添い、励ますこともあります。探険隊が到着する前日までには、ベースキャンプ内へのヒグマ侵入を防ぐ電気柵を張り巡らせ、風呂づくりのための地ならしなどもスタッフが行います。


荷物を背負って崖を登る（羅臼町教育委員会提供）

事前研修から始まる探険の旅路

探険隊の標準的な日程は、出発1週間前に保護者対象の事前説明会を開き、出発2日前に参加者が町民体育館に集まって、1日がかりで行程の確認や命綱の結び方、ご飯の炊き方のレクチャーを受けるなどの事前研修を行います。

探険の1日目は、午前5時に町民体育館で出発式を行った後、バスに乗り込み、道路が途切れる相泊（あいどまり）地区からは徒歩でベースキャンプ地となるモイレウシを目指します。最初の難関となる高さ約20メートルの観音岩はザイルを使って登ります。波が高く危険な岩礁帯のトッカリ瀬は干潮時を見計らって渡ります。モイレウシに到着したら夕食にジンギスカンを食べます。

2～4日目は、わんぱくコースはモイレウシに滞在してテントに泊まり、風呂をつくったり、いかだに乗ったり、漁を体験するなどの活動を行います。チャレンジコースは番屋に泊まりながら、さらに十数キロ先の知床岬を目指します。

チャレンジ隊の2日目は、ペキンの鼻を高巻きするなどして、二本滝の近くにある番屋に泊まり、3日目に最終目的地の知床岬を目指します。カブト岩などの難所を通過して無事にたどり着けば、岬でテント泊をします。4日目に船でモイレウシに戻り、わんぱく隊と合流し、到着パーティーを開催します。

5日目は、川でオショロコマ釣りなど個別プログラムを実施。6日目は午前8時からモイレウシを出発、徒歩で相泊に、午後4時にバスで町民体育館前に到着して探険は終了です。


干潮時に合わせて岩礁帯を渡る（羅臼町教育委員会提供）

自然を相手につらい経験アクシデントも学びへ

探険には、アクシデントが付きものです。初期の頃には道に迷い、引き返したこともあったそうです。

近年は、新型コロナウイルス感染症の影響で、2020年と2022年の探険が中止となり、2021年は途中まで船で行き、知床岬を目指すという変則的なチャレンジコースのみの開催でした。「コロナ禍で中断した後の2023年は、ほとんどの子が初参加だった上に、スタッフも初めての人が多くいました。初日


毎年作製するふるさと少年探険隊のＴシャツ

が珍しいぐらい暑くて、熱中症の危険もあったので『ゆっくりでいいよ』と声を掛けていましたが、内心は日没までに（キャンプ地に）着けるか不安になるほど時間がかかりました」と葛西さんは振り返ります。

２０２３年は、知床岬付近に人に近寄ってくるヒグマの情報があり、チャレンジ隊はカブト岩で引き返しました。２０２５年は、カムチャツカ半島の地震発生で津波警報が発令され、全員が撤退しました。今年も、海岸にクジラの死骸が漂着してヒグマの出没リスクが高くなったため、チャレンジ隊は知床岬まで進むことができませんでした。

直近で知床岬まで到達できたのは２０２４年ですが、その時も曇りで水平線に沈む夕日は見られませんでした。「２０２４年は、前の年とは比べものにならないくらいスムーズで、１回の経験がこれほど大きいのかと実感し、頼もしく感じました」（葛西さん）

石だらけの不安定な足下で、不慣れな薪割り作業などを行うため、擦り傷や打撲程度のけがは日常茶飯事です。野外活動がほとんどのため、熱中症気味になったり、日焼けがひどくなったりする子もいます。中には骨折して途中で帰る子もいたそうです。

「楽しいばかりじゃない、思い通りにならず辛い経験をすることが、目的地にたどり着いた時や、おいしく食べられた時の喜びにつながり、目的意識を持って何度も挑戦する子が次々と出てきます。しっかりとした教育プログラムを確立していることが長く続いている要因だと思います」と葛西さんは分析します。

アクシデントに即応 地域で見守る探険隊

２０２５年の探険は７月30日が初日でした。その日はカムチャツカ半島で起きた地震により午前９時40分に津波警報が発表され、町は避難指示を発令しました。当時、探険隊は最初の難所である観音岩にさしかかったところでした。

携帯電話の電波が微弱ながら入る場所だったため、津波警報の連絡に気付くことができ、スタッフ含め65人全員が観音岩の上で待機していました。すると間もなく、心配した計７隻の漁船とヒグマクルーズ船の船団が駆け付けてきました。町が探険隊の避難を決定すると、羅臼海上保安署が見守る中、漁船に乗って全員無事に避難しました。

葛西さんは漁師仲間たちの尽力に感謝する一方で、探険初日の半ばで中止に追い込まれた子どもたちの思いを「ネガティブなものにしないことも隊長の役目」と、どんな言葉を掛けるべきか悩んでいました。

その時、隊員の一人が「来年もう一回行くぞ。リベンジだ」と声を上げたそうです。その言葉に助けられた葛西さんは、来年はもう参加できない子には、「今度はスタッフとしておいで」と声を掛けることができました。

ふるさとを知る機会 これからも安全に

知床岬までの道中には、春に行うトキシラズ（サケ）漁や、夏のコンブ漁の時期だけ漁師が滞在する番屋が点在しています。探険隊の宿泊や緊急避難場所として利用している番屋も、近年は漁船の性能が向上したことで、漁では使われなくなり、修繕もされず老朽化が深刻になってきました。吉田さんは「今後、子どもたちの安全をいかに確保するかは課題になると思いますが、子どもたちにとって強烈な印象として残る６日間を、ふるさとを知る貴重な教育の機会として、これからも続けていければ」と話します。

葛西さんは「『なぜ危険な場所に子どもを連れて行くのか』という意見を耳にすることもありますが、この環境こそが私たちの日常であり、ふるさとをより深く知ることになります。十分なスタッフを動員して、参加者も制限し、安全に歩けるような体制で続けたいと思っています」と決意を語ります。


夕暮れのモイレウシ湾（羅臼町教育委員会提供）

よはくの本やさん

札幌市中央区

ハンドメイド作品なども並ぶシェア型書店
棚オーナーらに交流の場を提供

（文・写真／片山健一　取材日2026年10月29日）

札幌市営の路面電車「西15丁目」停留場から電車通り沿いに南へ4分ほど歩くと、シェア型書店「よはくの本やさん」があります。「いらっしゃいませ。どうぞ」と店主の小川順子さんが笑顔で迎えてくれます。現在100名超の棚オーナーが店を構える棚には、新刊・古本、ZINE（自主発行の小冊子）のほか、ハンドメイド作家によるイラスト、アクセサリー、雑貨、缶バッジなどの商品が並んでいます。





電車通りに面した
よはくの本やさんの外観

「シェア型書店がどんなものか、知らない方もまだまだ多いので」（小川さん）、人通りが多くて入りやすい路面店を条件に出店場所を探し、工務店で特注した本棚を入れて、2025年12月1日にグランドオープンしました。

今年7月、『けんぐゎい』で直木賞を受賞した朝倉かすみさんは、開店準備中に実施したクラウドファンディングで、棚オーナーになった一人です。今もサイン入りの著書を販売しています。3カ月で100冊販売することを目標に掲げ、実際に達成した棚オーナーがいたり、小学生が電車の写真集を手作りして販売したり、手持ちの絵本と棚に置いてある絵本を交換できるコーナーを設けたりと、利用方法やアイデアはさまざまです。

小川さんにとって書店は、本への愛情はもとより、自分が目指すお店の表現手段の一つという意味合いの方が強いそうです。会社員時代に採用を担当して人や会社とのマッチングの妙を経験し、旅先で出会った職人の手掛ける作品の豊かさに触れる中で、「いろいろな人や物が出会える場をつくりたいという発想から、シェア型書店という形態に行き着いた感じです」

一区画が約30センチメートル四方の棚利用料は、位置によって月額5500円と6600円の2種類を用意しています。現在は書籍関係の棚が7割、ハンドメイドの棚が3割ほどです。棚オーナーになると、1回（150分）500円で、ワークショップ（体験型の講座）などを店内で開催できる特典もあります。

開店からもうすぐ1年、「次に出すZINEのイラストを依頼するなど、棚オーナー同士の繋がりも深まってきました。これからも棚オーナーさんのやりたいこと、表現したいことを応援していきたいです」と小川さんは話します。











❶店内中央のテーブルではワークショップなどが開かれる❷直木賞作家・朝倉かすみさんの棚❸交流を育むワークショップなどの告知案内❹家族で出店する「市電の見える本屋さん」❺生き物などのイラストが人気の「くろがね工房」の棚



「新たな出会いに立ち会えることが楽しい」と話す代表の小川さん

店舗案内
所在地 札幌市中央区南4条西14丁目1-24　定休日 毎週水曜日他　営業時間 11：00～17：00　URL https://yohakunobi.co.jp/yohaku_no_honya.html
SNS Instagram https://www.instagram.com/yohaku_no_honya/?hl=ja　YouTube https://www.youtube.com/@yohaku_no_honya

Book Stories 8

ブック・ストーリーズ
本づくりのさきにあること——。

ピラケシ
平岸開村150年記念郷土誌

今年９月に発行した郷土誌



【編集者】
北海道新聞永田販売所
（道新りんごステーション）代表取締役
伴野（ばんの）　卓磨（たくま）さん



郷土誌のコンセプトや平岸への思いを語る伴野さん

CHECK

〖書籍概要〗

札幌市豊平区平岸の開村 150 周年記念事業の一環として制作された郷土誌です。平岸の台地が形成される過程を 4 万年前から追い、明治の開村、特産品となった「平岸りんご」の栽培、戦争の記憶、豊平町と札幌市の合併秘話、ハドソンの誕生から消滅など、時代の転換期を詳細にまとめています。また、住民たちの想いを未来へ繋ぐ企画として、代々平岸で暮らす 40 代～ 90 代の 7 人がまちの移り変わりやこれからの平岸について語り合う「座談会」、地域の方々から集めたエピソードを創作して全 14 話の民話にした「平岸のあたらしい民話」を掲載しました。ミニコミ紙連載「平岸の歴史を訪ねて」の第 100 回完結を記念して開催された「平岸・まち歩きツアー」の模様もまとめています。
規格：250 mm × 174 mm、360 頁、オールカラー、ソフトカバー、600 冊製作、2026 年 9 月
平岸開村 150 年記念事業実行委員会発行。

1871年に開拓が始まった札幌市豊平区平岸（とよひら　ひらぎし）は、かつてはリンゴ栽培で栄えましたが、現在は商業施設や飲食店が立ち並び、地下鉄南北線の平岸駅、南平岸駅からの都心へのアクセスも良好な都市機能を有する一方、春の桜や秋の紅葉が美しい天神山緑地や豊かな自然が残る精進川も流れる住みやすく、魅力あるまちです。平岸という地名の由来となったとされるアイヌ語「ピラ・ケシ（崖・端）」をタイトルにした本書は、「崖」が形成された地形の成り立ちや、リンゴに適した地質の特徴などを明らかにするとともに、縄文時代から現代に至るまでの地域のエピソードを物語仕立てで著しています。年表が入らない異色の郷土誌を編集した伴野卓磨さんに、企画意図や制作過程などを聞きました。

（文・写真／片山健一　取材日2026年10月15日）

ミニコミ紙の連載がきっかけに

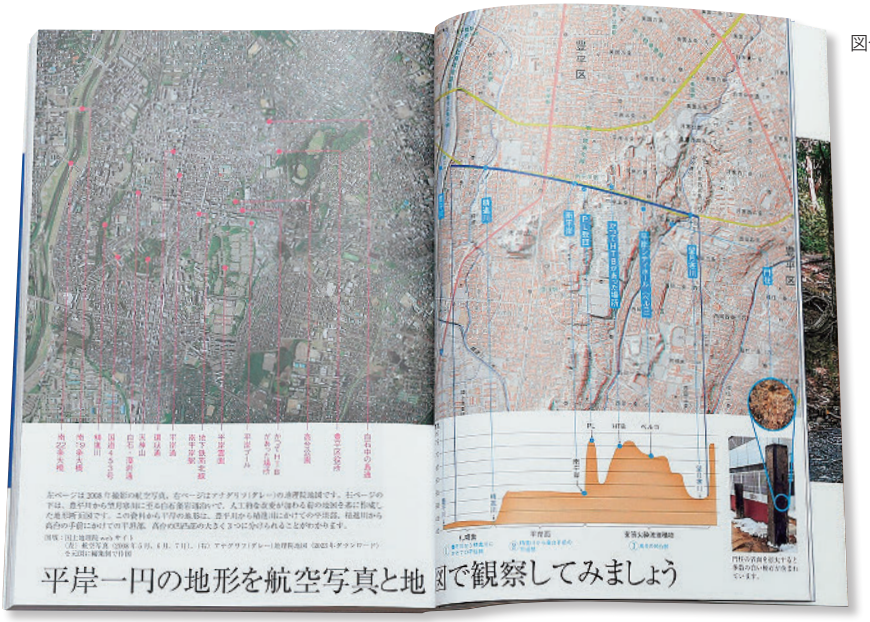
——郷土誌の編集に携わった経緯を教えてください。

購読者サービスの一環として、月1回、北海道新聞に折り込むミニコミ紙で「平岸の歴史を訪ねて」という連載を2014年3月から2026年4月まで続けていました。インターネットによって情報は無料で手に入る時代になりましたが、地域に関する情報は意外と少ないので、独自の視点で発信できればと始めたものです。

私は、金沢大学大学院に博士課程を修了するまで在籍し、地質学や古生物学など自然史系の研究をしていたので、歴史をテーマにした連載なら書けるだろうと、取材・執筆を一人でこなし、今年4月の第100回で一区切りを付けました。

最初の記事は、平岸の一部が高台になっているのは、支笏湖ができた4万年前の支笏火砕流による堆積物であることを紹介し、平岸の地形や地質に関する話題を中心に連載を始めました。歴史や地形に興味のない人にも分かりやすい文章と、図や写真も豊富に入れることを心掛けていましたが、マニアックなテーマなので読者の反応が心配でした。

連載を始めてから3、4カ月後に「伴野さんが書いている記事がとても面白いので、ご挨拶に来ました」と衆議院議員だった荒井聰さんが販売所に立ち寄ってくれ、それが励みになりました。その後、近所に社屋



図や写真を豊富に取り込んでいる

があったHTB（北海道テレビ）の樋泉実社長（当時）からも連絡があり、コミュニティーFMのFMアップル（エフエムとよひら）からは番組を持ってほしいとか、出前授業など講師の依頼も次々と舞い込むようになりました。

それで、自信を持って自分が面白いと思うことを書き続けていると、次第に歴史上の出来事が一連の物語として繋がっていきました。人脈も広がる中で、3年前に平岸開村150年記念事業実行委員会から、連載を基にした郷土誌を作ってほしい、と声が掛かりました。

「この本は楽しい」と言ってほしい

――郷土誌の編集に当たって意識したことや苦労したことは。

連載を通じて実感したことの一つは、都会でも地域史・郷土史が共通言語になり得るということです。自分が暮らす土地の歴史には皆興味があり、地域の成り立ちを知ることがアイデンティティーを醸成し、そこからさまざまなコミュニティーが生まれるのだと思いました。

今回の郷土誌は、いかにも郷土史誌という感じではなく、より多くの人に読んでもらえる形にしたいと考えました。歴史に苦手意識のある人が多いのは、学校の授業があまりに年表、年号を覚えさせようとするからだと思っていて、今回はあえて年表を入れていません。「歴史は苦手だけど、この本は楽しい」と言ってもらえることを目指しました。

また、子どもから大人まで幅広い年代に読んでもらうことも意識し、南平岸商店街振興組合が地域の人にインタビューをして、集めたエピソードを民話風に創作し、語り継ぐ「あたらしい民話」プロジェクトというユニークな活動を行っているので、「平岸のあたらしい民話」として盛り込むことにしました。

実は、郷土誌を制作することについて、3回断りました。本業に加え、新しい事業も計画している最中で多忙な上、まだ連載も抱えていましたし。いつかは連載を一冊にまとめてみたいとは思っていましたが、それは老後の楽しみに取って置くつもりでした。結局、断り切れずに引き受けましたが、連載の記事は一話完結を基本にしているので、そのままの順番で掲載しても話が繋がらないことが課題でした。

私が書き直す時間はないので、アイワードに編集作業を依頼しました。連載だけでなく、ブログの記事をテーマ別に分類整理し、章ごとに1つのストーリーとして再編



かつての名産だったリンゴを巡る物語


制作：道新りんごステーション　発行：道新多賀販売所、道新野田販売所、道新熊谷販売所　2026年4月1日（水曜日）

平岸開村150周年記念事業　協力：北海道新聞販売所

平岸の歴史を訪ねて～最終回～

第100回．過去から未来へ

12年に渡り連載を続けてきた「平岸の歴史を訪ねて」最終回では、「過去から未来へ」をテーマに3つの歴史的建造物がどのように活用されているのかをご紹介いたします。

サッポロ珈琲館平岸店

もともとは昭和13年に建てられた下本村共同醸場。当時、平岸は国内有数のりんごの産地でした。昭和11年にはシンガポールへの試験輸出が行われ、大評判となりました。しかし、昭和12年7月に日中戦争が勃発、シンガポールの宗主国イギリスとの関係も急速に悪化し、平岸りんごの海外輸出の道は閉ざされてしまいました。日中戦争は泥沼化し、規模世代の労働力不足が深刻化していました。そんな中、作業の効率化を図ろうと村民の共同出資で建設されたのがこの建物です。りんご園がなくなった後は、「株式会社平岸会館」として組合員により共同で運営。当初がまったくテナント応募がなく赤字続きでしたが、その後のレトロ建築ブームにより喫茶店として利用され、今に至っています。

高瀬和三郎がこの地にりんご園を開いたのが始まり。その後所有者が棚田家に変わり、第1次世界大戦による好景気によるりんごの高騰を背景に、平岸は札幌有数の富裕農村地域になり、この時期にレンガづくりのりんご蔵が建てられました。

所有者が手放す意向を示していることを知った神代社長が「マンションにでもなって、地域の宝が失われたら大変」と地域での活用を目指して2019年に購入。大幅な改修工事を行い、ダイニングバーとして活用され、地域の憩いの場となっています。

ゆる山ホール

平岸出身のりんご農家で生まれ育った小説家・澤田誠一氏の生家を改装し、ギャラリーとして利用されています。澤田家は明治時代に能登地方から入植し、りんご園を営んでいました。澤田誠一氏は、北海道を代表する文芸同人誌「北方文芸」の編集人・発行人としても活躍。「火山灰地」の久保栄や「森と湖のまつり」の武田泰淳など多くの作家がこの家を訪れ、文学が華やかだった頃の記憶を今に伝える希少な建物です。

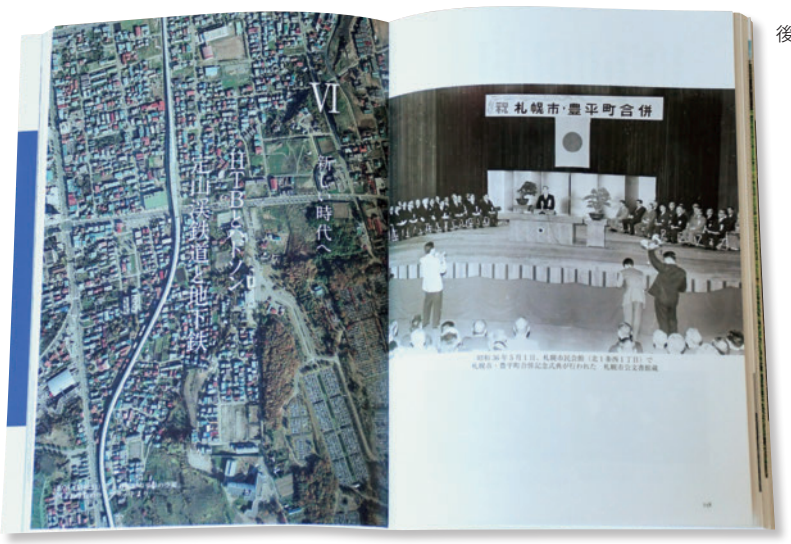
「平岸の歴史を訪ねて」の連載・第1回の編集後記で「平岸の歴史を振り起こし、郷土の変遷と発展をご紹介することで、先人の偉業を偲び、平岸により一層愛着を感じていただければとの思いで、この連載を始めることにいたしました」と書かせていただきました。以来、12年が経過し当初の思いを達成できたかはわかりませんが、その判断は読者の皆様に委ねたいと思います。長きの連載の間に地域の皆様からのご協力や励ましのお言葉を多数頂戴いたしました。こうした励ましが連載を続けていく上で大きな励みになりました。この場を借りて感謝申し上げます。

「平岸の歴史を訪ねて」は完結いたしますが、今後も様々な形で地域の皆様をつなぎ、平岸を盛り上げていく活動は継続していきます。今後ともご愛顧のほどよろしくお願いいたします。

※バックナンバーの配布は行っていませんので、ご了承ください。

【執筆者プロフィール】
伴野卓朗（ばんのたくま）。金沢大理学部卒、金沢大学院博士課程修了（理学博士）。道新りんごステーション代表取締役。まちあるき団体「ディスカバー・エゾ」代表。北海道新聞コラム「朝の食卓」連載中

郷土誌の基になった連載「平岸の歴史を訪ねて」
（写真は2026年4月発行の最終回）



後世に伝えるべき現代のエピソードを盛り込んだ

し、古い資料や写真も追加してもらったことで、より深化し、理想とするものが実現できました。

現代史を次世代に引き継ぐ

――過去の郷土史誌に載っていないエピソードなどはありますか。

昔のことを知る人は年々少なくなります。面会のアポイントメントを取っていたキーパーソンが入院してしまい、そのまま会えなくなったこともありました。

平岸の郷土史誌には、1981年発行の『平岸百拾年』という立派なものがありますが、それから約半世紀が経とうとしています。

そこで今回、特にこだわったのは戦後からの現代史です。平岸で誕生し、「桃太郎電鉄」などをリリースした日本初のゲームソフトメーカー・ハドソンのことや、大人気番組「水曜どうでしょう」などを生み出したHTBが平岸に開局した経緯、平岸で地下から高架へと切り替わる地下鉄のエピソードなどは、次世代のためにも書き残さなければと思いました。

また、1961年に豊平町と札幌市が合併する際、当時の町長と町議会議長が合併反対派に拉致された事件も、以前の郷土史誌には記載のない出来事でした。当事者が存命の間は、表に出せなかったのだろうと思います。それを関係者の一人から聞き、なぜ揉めたのか理由を含め記すことができました。

さまざまな物語があるまち

――平岸の魅力を教えてください。

平園公園では毎年、日露戦争で戦死した地元出身者らの慰霊祭を行っています。北海道博物館の学芸員に聞いたところ、道内で日露戦争の犠牲者を悼む慰霊祭を今も行っているのはここだけだそうです。

私は、登別市出身で、大学生から金沢市で暮らし、就職で帯広市に行き、転職して札幌市に来たので、こうした地元の人が気付かないような平岸の面白さや特殊性が分かり、客観的に書くことができたのだろうと思います。連載は一旦、第100回で終了しましたが、ネタに困ったことは一度もありませんでした。

連載の完結を記念した講演会を今年3月に豊平区民センター大ホールで開いたところ、300人ほどが集まり、「また書いてほしい」という声を多くいただきました。歴史を伝えることは、ライフワークだと思っているので、持続可能な方法を模索しているところです。



平岸天神が踊りを披露した出版記念祝賀会



編集者を務めた伴野卓磨さん

平岸は、適度に都心から離れていることで、明治の開拓期から長らくリンゴ栽培が行われ、HTBやハドソンなどのスタートアップの地に選ばれました。また、YOSAKOIソーラン祭りの強豪チーム「平岸天神」が地域の文化として定着するなど、さまざまなストーリーを紡ぎ出すまちだと思っています。

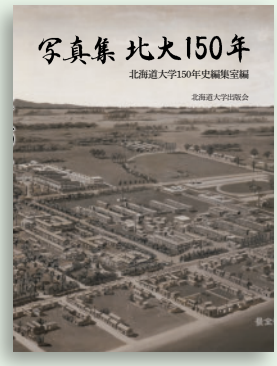
今年9月に開いた郷土誌出版記念祝賀会でも、いろいろな方の話を聞く機会があり、改めて面白くて魅力的な人が多いまちだなと思いました。

ほっかいどうの本

このコーナーは北海道の出版社から発行された本を社員が読み紹介しております。お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。特記以外は税込価格です。

写真集　北大150年

北海道大学150年史編集室　編
A4変型判　200頁　9680円
北海道大学出版会　発行
011・747・2308
978-4-8329-6912-4



1876年に札幌農学校として開校し、今年2026年に創基150周年を迎えた北海道大学。本書は明治から令和へと至る時代の歩みと大学の変遷を、約600枚の写真で振り返る一冊です。

貴重な写真資料の数々からは、変わりゆく校舎の風景や、W・S・クラーク氏をはじめ「開拓の精神」を受け継いできた先人たちの過ごしてきた日々がありありと感じ取れます。

私は北海道大学の卒業生の一人で、自身にとっても恵迪寮（けいてきりょう）や寮歌「都ぞ弥生」、所属していたサークル「黒百合会」など、150年を超えて今なお続く伝統が本書に掲載されているのを目にし、懐かしい記憶がよみがえりました。

本書は年表や解説文も詳細に記されており、歴史資料として北海道大学の歩みと精神を後世に伝えていく書籍となるでしょう。

卒業生や関係者にとっては自分自身の記憶と重ねながら楽しめるでしょうし、北海道大学とはゆかりのない方でも、写真を通して近代史や時代の変化を楽しめる魅力があります。

（クリエイション部　中村静花）

イグノーベル賞受賞！ オスメス逆転昆虫 トリカヘチャタテの研究

吉澤　和徳　著
A5判　44頁　1100円
札幌農学同窓会　発行
011・271・4972
978-4-909281-75-3



イグノーベル賞とは、ノーベル賞のパロディとして「人々を笑わせ、考えさせる」業績に贈られる賞で、1991年に第1回授賞式が行われました。本書の著者である吉澤和徳氏は2017年に「メスにペニスがある洞窟の虫を発見」で生物学賞を受賞しています。

著者は子どもの頃から昆虫が好きで、九州大学大学院博士課程修了後、北海道大学で研究を続けています。本書は受賞翌年に開催された記念講演の内容に、その後の研究成果を書き下ろしたものです。

チャタテムシの一種「トリカヘチャタテ」は、オスとメスの性器が逆転しているところが特徴で、オスには男性器、メスには女性器がついているという常識を覆しました。本書ではこの虫がどの様に進化したのかが書かれています。

この研究が人類の役に立つかどうかは別として、他者が興味を持たないようなことに、ただひたすらに没頭する著者の熱意が伝わってきます。昆虫好きをはじめ、そうではない人にも読んでいただきたいです。

（枚葉印刷部　藤村和輝）

佐藤毅写真集　野に祈る

オホーツク地域自治研究所　編
A4変型判　160頁　3960円
共同文化社　発行
011・251・8078
978-4-87739-447-9



今からおよそ150年前、明治期から昭和にかけての北海道開拓の裏側には、強制労働をさせられた多くの人達がいました。囚人労働、監獄部屋労働、強制連行など、人権を無視した過酷で暴力的な労働による殉難者の中には、未だ北辺の地中に残され暗闇に眠る方がいます。

本書は、網走（あばしり）地方で教鞭をとりながら、民衆写真家としてオホーツク民衆史を追い、記録し続けた、故・佐藤毅氏のドキュメンタリー写真集です。

佐藤氏によって撮影された数々の写真、常紋トンネルの監獄部屋労働者が残した手記、そして、長きに渡って殉難者の亡骸発掘を行いながら絶え間なく供養を続ける地域の方々の姿。これらが伝えるのは、紛れもない「真の歴史」です。

なぜ、そのような歴史が生まれたのか、それは未来に何を残したのか。一つひとつの歴史に真摯に向き合い、北海道に暮らす私たちがそれを伝え継いでいく必要があるのだと、深く気づかせてくれます。

（技術広報部　珍田由華）

新刊情報

書名の下の数字は日本図書コード（ISBN）及び雑誌コード。特記以外は税込価格。
お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。

北海道わくわく地図えほん　第2版
978-4-86721-193-9
文・絵　堀川　真／北海道新聞社　編
A4変型判　48頁　1650円

大地が躍動！　日高・十勝の地形と地質
978-4-86721-195-3
前田　寿嗣　著
A5判　176頁　1980円

レプンユカラ　北の海に伝わる物語
978-4-86721-196-0
茂野　優太　著
B5変型判　160頁　3300円

北海道　森と湖の日々
978-4-86721-197-7
水越　武　著
B5変型判　160頁　3520円

北海道コンサドーレ札幌
オフィシャルガイドブック2026/27
978-4-86721-199-1
北海道新聞社　編／コンサドーレ　監修
A4判　104頁　1650円

日高への旅
978-4-86721-198-4
伊藤　健次　著
四六判　272頁　2420円

カレンダー2027　しまえながのきもち
978-4-86721-201-1
写真　山本　光一
A5判　14枚　1100円

カレンダー　北海道の鉄道風景2027
978-4-86721-200-4
北海道新聞社　編
A3判　14枚綴り　1540円

ワインは北から
北海道ワイン教育研究センターが拓く未来
［北大道新アカデミーブックレット］
978-4-86721-204-2
北海道大学リカレント教育ユニット　編
A5判　144頁　1650円

北の自然じかん
ボクは都会に生きるハシブトガラス
978-4-86721-203-5
中村　眞樹子　著
B5判　64頁　1650円

新千歳空港100年
978-4-86721-202-8
相原　秀起　著
B5判　192頁　2420円

道新プラス　道新受験情報
2027高校入試　合格データ特集
16747-08
北海道新聞社　編
B5判　236頁　990円

——**北海道新聞社**
〒060-8711 札幌市中央区大通東4-1
☎011・210・5744

小林快次北大教授らが語る
古脊椎動物学
978-4-8329-1416-2
小林　快次　編著
A4変型判　104頁　2420円

写真集　北大150年
978-4-8329-6912-4
北海道大学150年史編集室　編
A4変型判　200頁　9680円

——**北海道大学出版会**
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
☎011・747・2308

介護員詩誌　新青春物語
978-4-89115-463-9
北岡　けんいち　著
四六判　206頁　1100円

——**中西出版**
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
☎011・785・0737

炭都夕張の約束
ビルドアップから再出発までの七〇年
978-4-909281-78-4
笠原　良太・水島　久光
嶋﨑　尚子・中澤　秀雄
島西　智輝・青木　隆夫　著
A5判　352頁　3300円

アイヌやめるのやーめた！
978-4-909281-79-1
原田　公久枝　著
四六判　246頁　2200円

佐藤毅写真集　野に祈る
978-4-87739-447-9
オホーツク地域自治研究所　編
A4変型判　160頁　3960円

赤字の数だけ愛がある
それいけ！ゲラ子業務日誌より
978-4-87739-449-3
喜多服　ゲラ子　著
A5判　104頁　1870円
（※Amazon POD版のため、書店ではお取扱いしておりません。）

詩魂の星雲体—河邨文一郎
978-4-87739-448-6
柴橋　伴夫　著
A5判　296頁　2970円

——**寿郎社**
〒060-0807 札幌市北区北7条西2丁目
☎011・708・8565

——**共同文化社**
〒060-0033 札幌市中央区北3条東5丁目
☎011・251・8078

表紙のことば

秋影の街角（しゅうえいのまちかど）
相澤　幸子
木版画　15・5㌢×15・5㌢

通院のため通りかかった札幌市立病院前の歩道。
秋の日差しは低く歩道の影も長い。来月にはこの街路樹の葉もすっかり落ちて、あたり一面真白になるのだろうな、と予想したら毎年のことなのに、この風景がいとおしく思えた数分間でした。
GEM木版画会　会員　小樽市在住

※季刊アイワードのバックナンバーを
弊社ホームページよりご覧いただけます。
URL https://iword.co.jp